２０２４．８．１８（日）使徒１８：１～４

18:1 その後、パウロはアテネを去ってコリントに行った。
18:2　そこで、ポントス生まれでアキラという名のユダヤ人と、彼の妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命じたので、最近イタリアから来ていたのである。パウロは二人のところに行き、
18:3　自分も同業者であったので、その家に住んで一緒に仕事をした。彼らの職業は天幕作りであった。
18:4 パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人を説得しようとした。

＜説教＞

「使徒の働き」18 章に入り、パウロのコリントでの福音宣教の様子が記されています（17 節まで）。〈アテネを去ってコリントに行った〉(1)パウロは、そこに〈一年六か月の間腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続け〉(11)ました。そしてコリントに〈神の教会〉（Ｉコリント 1:2)が生まれました。コリントでパウロがそれほどの期間〈腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続け〉たのは、何と言っても主の励ましの故でした(9-10)。そして良き「同労者」との出会いの故でした。その同労者が、今日の箇所に書かれているアキラとプリスキラ夫妻です。

パウロが〈アテネを去っ〉た様子は既に見ました。パウロはアレオパゴスで哲学者やアテネ市民に向かってイエスの十字架の死と復活のことを宣べ伝えました。しかし〈死者の復活のことを聞くと、ある人たちはあざ笑ったが、ほかの人たちは「そのことについては、もう一度聞くことにしよう」と言った。こうして、パウロは彼らの中から出て行〉(17:32-33)きました。〈ある人々は彼につき従い、信仰に入った〉(34)とは言え、ピリピやテサロニケやベレヤのようにはいきませんでした。パウロは「アテネを去る（直訳：アテネから去らされる)」こととなりました。もちろん問題は自らの文化と知恵を誇り、福音を聞いてもあざ笑い、まともに受け取ろうとしなかったアテネの人々にあったのですが。パウロも生身の人間です。残念な思いが相当あったと思います。

アテネを去ったパウロは西に 80 ㎞ほどのコリントに行きました。アテネが文化的、学問的に栄えていたのに対して、コリントは当時のローマ帝国アカイア州の首都として栄えていました。陸路と海路、両方の要所であり、当時のギリシア・ローマ世界の国際商業都市として繁栄していました。しかし同時にそこには「世界」の宗教も混在していました。ギリシア神話の女神アフロディトの神殿の他、エジプトの神々があり、シリアの女神があり、エペソの女神アルテミス(19 章）の神殿もありました。それらの偶像礼拝、宗教儀式と経済的繁栄が特に性的な乱れをもたらしていました。俗に「コリントの人」と言えば「不品行な人」のことだったほどでした。それほど肉的で悪魔に支配されていた都市でした。

さてそのようなコリントでしたから、パウロはあの偶像でいっぱいだった町アテネの時と同じように早速心に憤りを覚えて、一人でも伝道を始めたのかというと、どうも今度はそのようには記されていません。もちろんパウロがコリントの町について「それでよし」としたはずはありませんが…。実はこのコリントに最初来たときのパウロの様子について、後にパウロ自身が「コリント人への手紙」で正直に証言、告白しています。「あなたがた

のところに行ったときの私は、弱く、恐れおののいていました」（Ｉコリント 2:3）と。先にアテネの出来事があり、その無念さが残っているうちに、それに続けて「この世」の大都市コリントの状況を目の当たりにして、さすがのパウロも人間的には不安と恐れを感じたとしても不思議ではありません。そして同時に、それでも、ここでもイエス・キリストの「使徒」として、〈十字架につけられたキリスト〉（Ｉコリント 1:23、2:2）と復活を宣べ伝える務めの重大さを覚えたに違いありません。その主から委託された任務と責任の重大さを覚えればこそ、それを自分一人では担いきれないと自覚し、認めたのでしょう。

そんなパウロを主はあわれみ、顧みてくださり、〈そこで、ポントス生まれでアキラという名のユダヤ人と、彼の妻プリスキラに出会〉わせてくださいました(2)。アキラとプリスキラ夫妻は〈クラウディウス帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命じたので、最近イタリアから来ていた〉のでした。このローマ帝国第四代皇帝（在位 A.D.41−54 年）の命令は 49 年頃のことでした。このように、アキラとプリスキラ夫妻は（おそらく、間違いなく）その意に反してローマから 1,000 ㎞以上も離れたコリントに〈退去させ〉られて来たのでした。こうしてアテネから去らされたパウロと、ローマから退去させられた（「去る」も「退去する」も同じ言葉です）アキラ・プリスキラ夫妻を、神がコリントで出会わせてくださいました。それは双方にとって神のあわれみ、お恵みでした。

〈パウロは二人のところに行き、自分も同業者であったので、その家に住んで一緒に仕事をした。彼らの職業は天幕作りであった〉(2−3)。パウロはかつてのユダヤ教ラビ（教師）として、自活のための技術として〈天幕作り〉を習得していました。それがキリストの使徒とされた後でも見事に生かされたのです。さてアキラ・プリスキラ夫妻は自分たちのところに来たパウロを快く受け入れ、自分たちの家に住まわせ、一緒に仕事をしました。考えられることは、パウロは仕事だけのために二人の家に住んだのではないだろうということです。つまりパウロは二人に更に〈福音を伝え〉（ローマ 1:15）、ともに聖書を学び、主にある交わりをし、主を礼拝する生活をしたに違いないということです。宗教改革者カルヴァンの祈りに、「私がこの世の生のために労し、生活の必要と肉体の養いのために心遣いするときも、魂はさらに高く挙げられていて、神の子らに約束されている救いと、天上の生を望み見るようにさせてください。」とあります。要するにそういう生活です。

パウロと二人の良き関係は、この後シラスとテモテがマケドニアから来て、パウロがみことばを語ることに専念するようになっても（5）、パウロがティティオ・ユストの家に行った(7)後も続いたに違いありません。こうして二人は正しい教理を学びました。そして二人はコリントを立つパウロに同行し(18)、エペソに行ってそこにとどまり(19)、後から別に来たアポロに〈神の道をもっと正確に説明〉（18:26）するほどになります。またそのエペソで〈家の教会〉を形成します（Ｉコリント 16:19）。クラウディウス帝の死をおそらく機に二人は後にローマに帰ったと思われます。後に「ローマ人への手紙」でパウロは言います。「キリスト・イエスにある私の同労者、プリスカとアキラによろしく伝えてください。二人は、私のいのちを救うために自分のいのちを危険にさらしてくれました。彼らには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。また彼らの家の教会によろしく伝えてください。」（16:3−5a）と。このようにコリントで〈弱く、恐れおののいて〉いるパウロに、神はアキラ・プリスキラ夫妻という〈同業者〉、〈同労者〉を与えてくださいました。こうしてコリントでの〈説得力のある知恵のことばによるものではなく、御

霊と御力の現れによる〉パウロの〈ことばと宣教〉（Ｉコリント 2:4)が始まりました。

パウロは、平日は二人と共に「聖書の学びと礼拝の生活（仕事を含めて)」を送り、〈安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人を説得しようとし〉ました(4)。使徒の任務の重大さを覚え、自分の弱さを覚え、恐れおののくときに、神がその最善の御意思（みこころ）によってパウロに思いもよらぬ助け手を与えてくださいました。彼はそんな聖霊の働きと力に依り頼んで､十字架につけられたキリストと復活の福音をを宣べ伝えました。

私たちも家庭で、地域で、学校で、職場で、日々の生活の中で弱さを覚え、恐れおののきます。しかし神の善き御意思に信頼し、神の備えたもう助けを祈り求め期待し、みことばと聖霊の働きと力に依り頼んで神に従い、福音を宣べ伝えていきたいと願います。